

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Creat e , TOHOKU!

無料

第108号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)5月16日 日曜日

2021年(令和3年)5月16日 日曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、67歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の崎上映会は延期。乗けて縄文を日大の新しい制作に代れた東北文化研究。埋もれた東北の歴史を掘り出すこととを標榜。



千年以上も継承されてきた東北郷土芸能 大災害も飢きんも疫病も乗り越えて今も息づいている

シリーズ【東北の郷土芸能】 開始にあたって ①

前号に続き東北郷土 芸能に関連した記事

前号で東北の郷土芸能に関する簡単な紹介記事とこれまで撮りためた写真を三面に亘って数多く掲載した。それにより大震災と東北郷土芸能の関係について、さらに東北郷土芸能の入り口レベルの知識も少しはお知らせすることができたのではないかと考えていた。しかし時間が経過するにつれ、あれだけでは東北の郷土芸能の入門レベルとしてもあまりにも紹介不足で不親切すぎるのではないかと思い始めた。

筆者は、東北で生まれてから東京に移るまでに見聞きた郷土芸能や、その後、当新聞創刊以来の十年ほどの間あちこちに取材して知りえた東北の郷土芸能の知識もある。多少は知っているとは思っていたが、東北の郷土芸能をまったく知らない人々に伝えるには、非常に不親切に思えたのである。

また、日常的にそれらの郷土芸能に接する機会も多いので、筆者自身としては取り立ててめずらしいものでもなく、東北の歴史の遺産のひとつという位置づけになっていたのは確かである。

しかし、前号でも触れたが、大震災で未発見の郷土芸能がたくさん発見されたこともあり、ましてやそのルーツや歴史、背負ってきた意義などはまったく未開拓のままではないのかとあらためて気がついたのである。

それで、そうした観点から東北郷土芸能を掘り下げ、「東北再興」と関連させたこの連載を始めようと考えた。

専門家になれば、東北郷土芸能の知識も体験もほんのわずかで取るに足らないものだが、東北の郷土芸能を知らない方々のご参考になればという思いで始めることにした。

いつも言うことだが、東北は何かにつけ対外的な宣伝不足のため他地域に比べれば知名度低い。北は何かにつけ対外的な宣伝不足である。この郷土芸能にしても同様である。他地域の伝統芸能といえば、まずは京都が群を抜いて有名である。祇園祭、葵祭、大文字焼きその他国際的な観光資源としても有名である。

関西や九州にも多くの有名な伝統の祭りがある。北陸にもある。山陰にも神楽がある。それらは数え上げればきりが無いほどである。それらに引き換え、東北で有名な伝統芸能は、三大夏祭りの「ねぶた祭」、「秋田竿灯」、「仙台七夕」くらいであろうか。

大震災後に「東北六魂祭」として、山形の「花笠まつり」、岩手の「さんさ踊り」、福島「のわらじ祭り」が加わったが、対外的に知名度が上昇したのはそれくらいであろうか。



鹿の角を使った鹿おどり①



鹿の角を使った鹿おどり②



鹿の角を使わない鹿おどり③

多種多様な東北の郷土芸能

前号でも触れたが、三陸沿岸部で多くの郷土芸能が「発見」されたが、おそらく、東北の郷土芸能の調査や研究はこれからのなのであろう。

その種類は数え上げるのも大変な数に上るだろう。整理分類も、大変な作業となるであろう。

幸か不幸か、大震災で出現した東北郷土芸能によって、東北は一挙に郷土芸能の宝庫になったともいえる。郷土芸能関係の仕事をしている筆者の知人がいるが、「東北六魂祭」の流れを引き継いで「東北裏六魂祭」というイベントを本気で企

画してみようかと思ったり、いろいろ話を聞いたことがある。どちらかといえば、郷土にしっかりと根付いているという感覚が希薄化している東北三大祭りの陰に隠れてはいるが、地元根付き、地元の歴史をずっしりと背負うような多様で多くの郷土芸能が地域限定で開催されていて、ほとんど「外」に出ないままになっているが、それを引っ張り出してはどうかという話であった。

いつかぜひ実現してもらいたいものだ。実現すればすごいことになることは請け合う。

「鹿踊」(ししおどり)は日本の農業とは異質な匂いがする

筆者は、今回特に取り上げたいのは「鹿踊」という郷土芸能である。

鹿の角を頭に乘せた装束に太鼓を抱えた踊り、または鹿をデフォルメした獅子頭をいだき、太鼓は持たない踊りもあるが、双方ともどこか非常に古い狩猟文化の匂いを漂わせていると筆者は感じるのがあるが、ぜひ現地に行ってみて、実際に見て欲しい。

そして、特におすすめなのは、昼ではなく、夜の踊り。闇のなかから出現する野生の雄鹿が激しく踊るさま

を見た、ほんとにこれが日本の郷土芸能なのかと目を見張ることだろう。

そういえば、鹿にちなんだ古代からの踊りは、ユーラシア大陸北部に結構あるが、そうした流れを汲んだものが東北に流入して出来上がったのではないかと秘かに考えている。

ざっと数え挙げても、たくさんの流派がある「鹿踊」は岩手を中心に残っているが、こうした郷土芸能は他の郷土芸能とは異なる匂いがするのだ。

日本は農業国という常識が広まっているが、そうした常識を打ち破る狩猟文化の匂いがプンプンする。

たかの岡本太郎が、この「鹿踊」を初めて見た時は大変感激して興奮したという話もある。

夜神楽がいい

ついでに、筆者の好みを披歴して申し訳ないが、郷土芸能のなかにあるさまざま

「夜神楽」である。人口灯ではないかがり火のなかに浮かび上がる「神楽」を見てみると、まるで異界に引きずり込まれるような感覚に襲われる。そんな得難い体験をしたが、いまでも忘れられない。

郷土芸能の奥深さ、異界、神々の世界などを感じたいならば、夜に限る。

言い過ぎかもしれないが、昼間の神楽は何となく緊張感が希薄に思えるのだ。

ドロドロした異質の世界を感じられる東北の郷土芸能は夜に限る。

そのルーツは？

多種多様な東北の郷土芸能であるから、そのルーツもひとつということはまずありえないだろう。

様々なルーツ、様々な人や組織を介して古代に伝えられ、あるいは、東北で独自に、段階的に変容されていったものなのだろう。

古代は娯楽もなかったのだから、そこに全国を渡り歩く修験者や山伏たちが、当時の都などで流行っている芸

能を東北に伝えたのかもしれない。

そうした修験者や山伏たちは、布教活動だけでなく、芸能普及にも一役買っていたであろう。

他方、前述の「鹿踊」は、どういったルーツで東北にもたらされたのだろうか。

古代奈良からの伝来説もあるようだが、筆者は大陸から伝来した可能性にロマンを感じる。どこかしら農業が津々浦々に浸透した日本には感じられない野生味を感じずにはいられない。

かなり古い時代に大陸北方ルーツから流入したと考

計にそう思う。

千年以上継承してきたが今は存続危機

大震災で「発見」された東北沿岸部の郷土芸能の調査や研究は必要だと思う。

しかし、その調査や研究終了に間に合わずに、後継者不足で存続が危ぶまれている郷土芸能もあると聞く。

ただでさえ、高齢化と過疎化が進む沿岸部だったが、あの大震災で、過疎化が加速化している。

そのために継承者である若手が集落にいなくなって

んとも悲しいことである。

郷土芸能の中には千年以上も継承されてきたものもあるようだ。

そうしたものを、いまになって廃れさせ、消滅させてしまうのはまことに心苦しい。

何とか手立てはないものだろうか。

大災害も飢きんも疫病も乗り越えてきた

千年と一口に言うが、その千年の間には、自然の大災害もあり、冷害と飢きんもあり、疫病もあり、その他さまざまな災害があったはずである。

それら乗り越えて東北の郷土芸能は継承されてきたのだ。

いま、その意味を掘り起こし、単なる郷土芸能という視点ではなく、かつて生きてきた東北の祖先たちが、その郷土芸能にどういった思いを託してきたのか、さまざま災害を乗り越えることと郷土芸能はどんな関係があったのかを掘り起こしてみようではないか。

きつと深い知恵が引き出されるであろうし、子孫に向けたメッセージも拾い上げることができるかもしれない。

その作業のなかにこそ「東北アイデンティティ」の発見があるのではないかと考えるのだ。



夜の神楽



夜の鹿おどり



夜の南部ばやし

第81回

水産業再興のための料理
レシピ紹介

《三陸のスズキの刺身薄造り》

スズキが店頭にあるのも珍しいです(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

三陸のスズキの3枚おろしが売ってました。これは薄造りにした刺身です。とても旨味がありますね。食べ方は、わさびや三杯酢でも良さそうです。(松本談)

東北産地酒が大好きな編集者は即座に晩酌を想定してしまう。超辛口系の日本酒が合いそうです。(編集者)



オリンピックが終わるまで三陸の会開催はむずかしいんでしょうか？自粛が終わっていいよかなと期待しては再自粛で裏切られる。待ちくたびれました。早く美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！再開までは写真画像と家飲みで何とか耐えるしかない。再びお会いできる日を首を長一くして待っております！



写真でお伝えする 東北の風景

「虎舞でコロナ禍をぶっ飛ばせ！」

写真撮影 尾崎匠



それぞれの地域の 拠点施設を巡ってみて

今年も出された共同 メッセージ

ゴールデンウィークを前に、今年も東北六県と新潟県、並びに仙台市長と新潟市長の連名で「東北・新潟共同メッセージ」心を一いつに故郷を守ろうと出された。①県境をまたぎ移動の自粛等、②基本的な感染防止対策の徹底を呼び掛けるものである。

①については、緊急事態宣言対象都府県との往來を自粛する、まん延防止等重点措置区域との往來についても極力控える、②については、マスクの正しい着用、こまめな手洗い、消毒、「三密」の回避などの基本的な感染予防対策の徹底、飲食店を利用する場合は感染防止対策が講じられている店を利用する、多人数や長時間に及ぶ会食の自粛、会話の際のマスク着用の徹底などが要請されている。

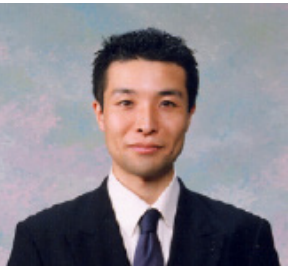
「道の駅かくた」

角田市は宮城県の内陸南部、阿武隈川流域にある人口約二万八千人の市である。大豆や梅の栽培が盛んで、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の研究施設、角田宇宙センターもある。八つが現存する平安時代の阿弥陀堂のうちのひとつ、高蔵寺阿弥陀堂があることも知られる。ここにある「道の駅かくた」は二〇一八年にできた新しい道の駅であるが、「米・豆・梅・夢・姫のまち角田の新交流拠点」と銘打ち、建物内に農産加工室を併設している。角田産の農産物や加工品が購入でき、飲食もできる。

この道の駅かくたが担う七つの役割として、①快適な休憩と道路および地域情報発信する場、②市民が集い、交流する場、③多くの観光客等が訪れ、市内の人々が交流する場、④地域の活性化を広げる場、⑤地場産業の振興に寄与する場、⑥安定した賑わいが続く活動の場、⑦地域の安心を担う防災の拠点となる場、が挙げられている。地域情報の発信や人々の交流、地域の活性化や地場産業の振興は道の駅の役割としてはもちろんのことだが、⑦の防災の拠点となる場というのは、東日本大震災を踏まえてのことである。あの震災の際には東北各地の道の駅が自衛隊や消防の後方支援拠点となった。ライフラインとしての機能も果たしてきた。その役割を最初から織り込んであるわけである。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnas1/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

報を発信する場、②市民が集い、交流する場、③多くの観光客等が訪れ、市内の人々が交流する場、④地域の活性化を広げる場、⑤地場産業の振興に寄与する場、⑥安定した賑わいが続く活動の場、⑦地域の安心を担う防災の拠点となる場、が挙げられている。地域情報の発信や人々の交流、地域の活性化や地場産業の振興は道の駅の役割としてはもちろんのことだが、⑦の防災の拠点となる場というのは、東日本大震災を踏まえてのことである。あの震災の際には東北各地の道の駅が自衛隊や消防の後方支援拠点となった。ライフラインとしての機能も果たしてきた。その役割を最初から織り込んであるわけである。

足を運んだ当日はキッチンカーが何台も並び、屋外で地元農産物が販売されるなど活気のある様子であった。

丸森産いちば八雄館といなかの道の駅やしまや

「丸森産いちば八雄館」と いなかの道の駅やしまや

丸森町はその角田市の南隣にある、やはり阿武隈川流域の人口約一万二千人の町である。和紙やへそ大根、あんぼ柿、たけのこなどの物産で知られる。かつての地元の豪商の屋敷や蔵が「蔵の郷土館 齋理屋敷」として公開されている。

その齋理屋敷の向かいにある「丸森産いちば八雄館」は震災直後の二〇一一年七月にオープンした地場

産品直売所で、丸森町で採れた野菜、農産加工品、木工・手芸・工芸品などが購入できる。ホールスペースも併設されており、各種展示やサークル活動、休憩所としても利用されている。

丸森町にはもう一軒、「いなかの道の駅やしまや」がある。丸森町の中心部からさらに阿武隈川の上流におよそ一〇キロメートル遡った耕野地区にある。元は親子三代で切り盛りする小さな商店だったが、これも二〇一一年に「二道の駅」をコンセプトにリニューアルオープンした。店先には川のせせらぎが聞こえるウッドデッキを備え、ちょうど今季節は名産のたけのこを求めて県内外から客が訪れていた。店の一階は丸森町の特産品はじめ、新鮮野菜や豆、乾物などが並ぶ直売所で、客同士の交流を促すためにお茶が飲める休憩所もある。二階はこの地区特産の「ころ柿(干し柿)作り」に欠かせない柿ばせ(柿干し場)がある。春はたけのこ掘り体験、秋はこのころ柿作り体験など、季節のイベントも積極的に開催している。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

丸森町は令和元年東日本台風で大きな被害を受けたが、今回足を運んでみて、その爪痕を感じさせるものは見当たらず、順調に復興を遂げてきたことが感じられた。震災の時に相次いで交流の場をつくったその姿勢が今回も活かされたと言えるかもしれない。

「この地価格で購入できるのも魅力的である。」

「いしのまき元気いちば」

石巻市は南三陸町の南隣、人口約一四万七千人を擁する宮城県第二の都市である。旧北上川の河口に位置する港町で、東日本大震災では全ての市町村の中で最大の被害を受けたが、そこから力強く立ち上がってきた。その一つの象徴とも言えるのが、「いしのまき元気いちば」である。旧北上川のほとり、石巻の中心部に二〇一七年六月にオープンした、食事と買い物を楽しめるスポットである。

この施設で特筆すべきは立地している場所が旧北上川の河川堤防上ということである。かつて河川堤防がこのような形で地域振興のために利用されたことはなかったが、現在国土交通省が主導して地域の「顔」、そして「誇り」となる水辺空間の形成を目指す「かわまちづくり」が進められており、東北でも二五の地区で計画が遂行中である。この石巻地区のかわまちづくりは、同じく震災からの復興を企図した閑上地区のかわまちづくりと共に、そのトップランナーとも言える存在である。

同市場は、石巻市と食品加工関連一六社、地元料理店四店、地元企業八社などが一同に集まり、旬の鮮魚、水産加工品から、農産品、地元の特産品、三陸地域や震災復興応援地域の特産品などが豊富に取り揃えられている。まさに石巻都市圏の中心都市である面目躍如たる存在とも言える。

「シーパルピア女川」

女川町は石巻市の東隣に位置する人口約六千人の町である。女川町も震災で中心街の建物がごとごとく流失する被害を受け、町内で買い物ができない状態が続いたが、翌年の二〇一二年四月に仮設の「きぼうのかね商店街」がオープンした。二〇一五年一月に、女川駅前テナント型商店街「シーパルピア女川」が完成し、多くの商店はそこで再開した。現在、二九の店舗が軒を連ね、町民の日常生活をサポートする商店から、町外の観光客のニーズにも対応できる飲食店や土産物店、それに観光物産施設「ハマテラス」も入っている。

「町内外の人が気軽に訪れ、集い、語り合う場をつくる」ことを目的に、海を見下ろせる駅前広場や「レンガみち」が整備され、交流が生まれる場づくりが意識されている。ちなみに、この「レンガみち」は高台に通じる避難路も示しており、津波からの安全な避難を意図したものに仕上がっている。こちらも、港町ならではの新鮮な旬の魚介類や水産加工品を中心とした特産品が購入でき、また海鮮だけでなく、ステーキやイタリアン、カフェ、ピストロ、ピア

「浜の駅松川浦」

福島県相馬市は、福島県浜通り北部に位置する人口約三万七千人の市である。宮城県に隣接し、仙台大都市圏にも含まれており、松川浦の海産物や一〇〇〇年以上もの伝統を誇る相馬野馬追で知られる。その松川浦に昨年一〇月にできたばかりの「浜の駅松川浦」には、地元の人々の強い願いが込められている。福島県の浜通りは言わずと知れた、東日本大震災による津波被害と原発事故に伴う放射線被害、風評被害に苦しめられてきた地域である。

冷たい親潮と温かい黒潮とがぶつかって潮目が生じる日本屈指の好漁場である浜通りで取れる魚介類は「常磐(じょうばん)もの」と言われる、知る人ぞ知るブランド銘柄である。松川浦と言えども、東北で唯一あおさが取れる地で、それだけでなくその味も全国屈指と評判だった。そうしたかつての浜の賑わいを取り戻すため、また風評被害を払拭して地産地消を推進していくために、復興のシンボルとなる市民市場として整備されたのがこの「浜の駅松川浦」だったのである。

ここでは、「買う」「食べる」「観る・遊ぶ」「つくる」「つながる」の五つの柱を打ち出して、「市民の台所」兼「人

気観光スポット」となることを目指している。

各拠点の持つ役割の 大きさ

ここに挙げたのは各地にあるうちのごく一部ではあるが、こうして見てみると、各地に実に多彩な拠点があることが分かる。そしてまたそれらが地域の特色や特産物としっかり結びついていくこと、そうした情報もしっかり発信していることも特筆すべきことである。ホームページがあることはもちろん、ブログやSNSなどでその時々々のトピックスや旬の情報をいち早く発信している。こうした施設がそれぞれの地域の情報を発信し、交流する人の数を増やし、地域に賑わいをもたらすために果たす役割は実に大きいと言える。

今はコロナ禍で実施は難しい面もあるが、地域内外を問わず参加できて楽しめるイベント企画をより積極的に開催できると、自ずと交流も増え、地域の盛り上がりにもつながっていくことだろう。これらの拠点には、そうした人を呼び込むための企画力が求められているわけであるが、それはそれぞれの地域の住民を巻き込んで地域一体となって考えていくのがよい。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。

自分たちの地域の魅力を再確認することにも、地域づくりに主体的に関わることもつながり、一石二鳥である。



蕨とサクラ



池とサクラ



サクラとレンギョウ



石塔とサクラ



サクラ並木

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立夏」
遠野 1000 景より

ほんとうに、いつになつたらコロナ禍によるさまざま「制限」が完全に解かれるのであろうか。イソップ童話のあの有名な話の一つである、通称「オオカミ少年」のように、何度も何度も「制限」が宣言されると、だれも「制限」

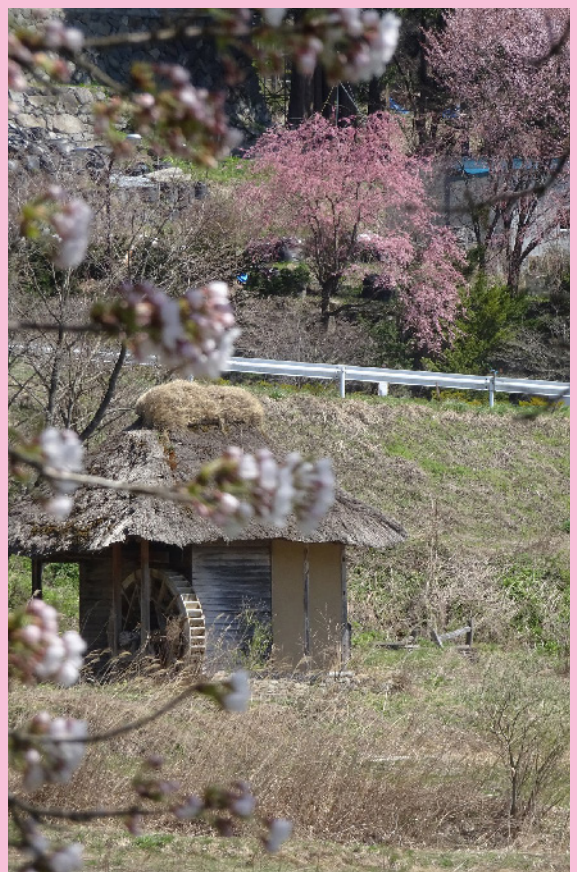
に耳を傾けなくなるのではないかと危惧する。あまけに東京圏の通勤時間帯の電車は相変わらず満員放置だし、オリンピックの聖火ランナーは「制限」下でも続行しているのに、それを国民は見てはならない、不要不急の外出は控えるといわれる。いったいどうしたらよいか迷う。そうした東京圏の混乱ぶりにもかかわらず、遠野の「立夏」は桜満開である。そういえば、東京では桜の季節に外出はいけなと言われたので、花見をしていないことに気がついた。遠野の桜の写真をじっくり見ながら、「バーチャル花見」を楽しもうと思う。



斜陽と鳥居



一本コブシ



水車小屋とサクラ

東北人が思い出したい 遠野の石の積み上げ方の事

今回、私はかなり不思議な話をするかも知れない。

もちろん、これまでにも東北について語るべきこの場において、突然宇宙の話をしたり軍艦の話を始めたり、多分にまともではない切り込み方を度々させて頂いているのだが、今回取り上げたい一冊『巨石文明・超テクノロジーの謎』に関してはその著者自身が、似非科学として云わばイロモノ扱いされる事を危惧しているようにも思われる。

副題からして「超テクノロジー」などあり、その帯には、「高度な測量術・天体観測術で造られた巨石群は宇宙のパワーを操る装置か？神と交信する呪術ス



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め、東北好きである。

本書の中心となるのは、何といつてもアイルランドやスコットランド、ウェールズそれにイングランドも含む、所謂ケルト文化圏に多く現存する謎の巨石遺構群である。他にも日本各地の巨石遺構や、意外なところでは地中海のマルタ島周辺の巨石建築物も取材して、これら共通して紀元前二千〜六千年前にも遡るといふ巨石文明がいかに世界に広がっていたかという点も示唆しているようだ。

英国圏の巨石遺構ときて多くの人の心にまず思い浮かぶのはイングランドのストーンヘンジであろう。しかし本書に提示される巨石遺構の数々は自身初めて知るものが多く、その内容はどれも全く驚嘆すべきものであった。

まず驚かされるのが、著者の一人・秋山眞人氏が十代の頃に超能力少年としてマスコミに取り上げられた過去のある、強い靈感を自認する人物だという事だ。

やはりトンデモ本か、と身構える？ところなのだが、もう一人の著者・布施泰和氏は国内外の一流大学を経て政治経済に長年関わってきたジャーナリストでもある巨石研究者で、膨大な取材の上で検証を行うなど、互いの長所を生かしあい絶妙なバランスを生み出しているようだ。靈感の強い秋山氏の仮説や自論の展開も少々こじつけ感が否めない部分もありながら、一般の読者にとつても説得力があると考えさせられる内容も多い点には好感が持たれた。

一体、この巨石遺構とは何なのか？秋山氏はまず冒頭で、かつて自身が英国政府の許可を得て、ストーンヘンジの中央まで立ち入った際の体験を語っている。大地から猛烈な光が蛇か龍のように螺旋状に絡まりながら天へ昇っていく様子を「霊視」したというのである。何とも言えない話だが、この蛇や龍に似た光、螺旋そしてその霊視の後強い精神的浄化と癒しを感じたという点に、大きなヒントが隠されているようだ。

著者両氏が着目するのは、既によく言われてきた巨石遺構の天体観測装置としての機能、特に毎日少しずつその姿と場所の変化を肉眼で直視できる天体・月と人類との関係の深さである。人間は古代どの瞬間に天体の運行法則に気づき、その追究に執心するようになったのだろうか？アイルランドの有名なニューグレンジ遺跡に隣接する墳丘ナウスには月の満ち欠けを凶に表したカレンダーが石面に刻まれており、いかに当時の人々の生活が月とともにあったかが想像される。

現代科学的に考えれば、月が地球上の自然現象や生物へ与える影響とは、多分にその天体を持つ引力によるものだ、という事になるだろう。しかし秋山氏によれば、月はその光自体に霊力があり、満月の日に元気になる人がいれば、逆に新月の日に陽気になる人、両

方の影響を受ける人がいるという。その目には見えな偉大なエネルギーを地上の巨石に施した仕掛けで取り込めば、人々の滋養・治療に役立つ事ができるに違いない。その確信は、古代人の直感的な物理学の所産なのだ氏は主張するのである。個人的に解釈すれば、宇宙に発見した法則を表す遺構を地上に配置する事で、常に宇宙のうねりとともに生きる実感を得ていたという事だろうか。

それがそれ以前より一段進化した、新たな人間の証明だったのかも知れない。多くの巨石と後にその地に花開いたケルト文化に顕著な渦巻き文様はじめ、遺構に刻まれた様々な図柄の解釈も興味深い。渦巻き文様といえば、私も以前ケルトと日本の縄文文化の奇妙な共通点として言及した憶えがあるが、実は宇宙や夜空を霊視すると、光る粒子のようなものが渦を巻いて見えるのだ、という「霊能者」視点からのシンプルな解答が為されるのだ。つまり、宇宙・大地から発する霊的な力は渦巻きに見える。画家ゴッホの描いた空間に渦巻きがあったのは、彼にそれが見えていたからだという大胆な仮説も立てられ、現代人の大半が進化(退化？)の過程で失ってしまった云々動物的な感覚、その表現としての遺産が渦巻き文様であった可能性を

そこに見る事ができるのだ。ナウスやニューグレンジの石に遺された文様は古代人が霊視した、あるいは直感した過去・未来の霊の記憶やエネルギーを表現したものであり、中にはこの世界と並行して存在する異なる秩序の世界を表したのではないかと、この推察あり、多くの巨石遺構に共通する、夏至と冬至の日の出・日の入に合わせた配置にも、それらの時期に異なる時空が開き、交流が可能になる、との解釈あり。これをあり得ると見るか、ファンタジーと見るか。やはり現地で見ると、自分の得た感覚を信じるしか今は答がないのかも知れない。

私個人の最初の巨石体験といえば、何と言っても岩手県遠野市綾織町の山の中に聳える続石である。本誌でも遠野の風景を紹介するコーナーで何度か登場している記憶があるが、とにかく奇怪で見事な、ドルメン型の巨石遺構である。

実は遠野市の天然記念物となつている事でも明らかになつたように、人の手によるものではなく氷河期の解氷か土石流で山岳上部の巨石が降りて下部の石の上に乗り降りする自然形成説が主流である。本書は平泉近くの月山にある和我叡登拳神社や遠野の三日月神社の「羽黒岩」などの巨石を取材しているが、残念ながら続石には言及がない。高知

や広島、静岡など全国に巨石遺構があり、沖繩や岐阜には高度な天体観測遺構もあるという事も本書で知る事ができたが、やはり続石ほど見事なドルメン型巨石は他に見られないようだ。

大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡など、ケルト圏のものに匹敵する高度な技術と規模を伴ったストーンサークルの大半が東北北部に集中する事を思うと、あの続石だけが本場に天然なのか？と疑いたくなるのも無理からぬ事に思えるのである。

一時期ミステリーサークルとして話題を攫った英国平原に出現するクロップ・サークルは多くが捏造だが、そうではない未解明なものもあると云い、そうした不可思議な現象があった場所に目印として巨石が配置されてきた可能性も示されている。東洋の風水で言えば「大地のエネルギー」の通り道である龍脈、出入口である龍穴のようなもので、つまりは巨石そのものが信仰対象となる以前に、それが立てられた場所自体が特別なのだという事だ。檜崎卓月というミステリアスな物理学者が、異なる立地の製鉄所と同じ鉄を精製して出来るとか、住めば必ず発展する土地と逆にならず衰退する土地があるとか主張したと言い、無庸充分な検証が必要ではあるが、これは同じ

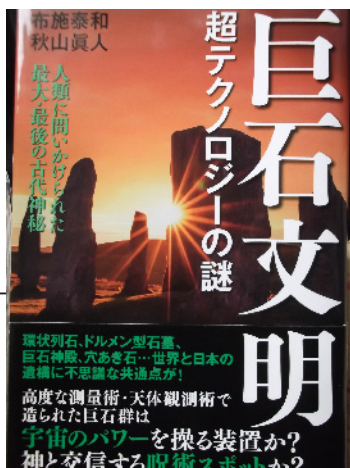
ケルト民族は謎の先住民の遺した巨石群を尊崇し、むしろ自らの文化として大切にしたい。それ故、彼らの地に巨石遺構が残ったと言えるのだが、対して更に後世渡来したキリスト教徒らはこれら古代遺跡を異教徒の遺産だとして破壊し続けたのである。これを憂えた一人のスコットランド人が、巨石の残る敷地を買い取るなどの身を挺した保全運動を行い、貴重な史跡が今に遺された事実もあるようだ。

旧日本軍も静岡県の愛鷹山などで巨石群や神社に対し破壊工作を施したとされ、その理由は帝国の八紘一宇・万世一系などの理念に矛盾する存在だったからではないか、と秋山氏は言う。その真偽は不明だが、もし古代日本人の「危険思想」によつて造られたが故に破壊の対象になるのだとしたら、「これは自然にできた物」としておいた方が、保存したい側からすれば都合

がよかつた訳である。実は本稿のタイトルにももつてみた「巨石の運搬」に関する謎については、本書では追究されていない。巨石を語る際には無論避けては通れない問題だが、こちらでも始めると、所謂この原理とかよりは、巨石に振動や呪文を与え、宙に浮かべたとされるエジプトのトトや、日本の役小角が「人類が忘れ去った技術」を持つていたのではないか、という仮説に魅力を感じるようになる。やはり、本物のトンデモ本確定、への道となつてしまひそう。

だが著者は言うのである。巨石には人間の心を惹きつけ、癒す不変の力があると。彼ら巨石の忘れられ見えなくなった真実に、行き詰まりを見せる現代文明への解答があるのだろうか。

ならば再び人類が覚醒すべき地は、遠くケルト圏か、はたまた他ならぬこの東北か。その時こそ新たな続石が積み上がる、そんな光景も有り得なくはない。



「巨石文明 超テクノロジーの謎」2020年・河出書房新社

特に災害の多い東北、災害の歴史を振り返り、未来に役立てる！ 火山よりも何十倍もの規模のカルデラ火山を知っているか？

シリーズ【東北の災害の歴史】 開始にあたって ①

特に災害の多いと言われる東北であるが、災害の歴史を振り返り、未来に役立てるシリーズを今回号から開始

初回はカルデラ火山！

災害とは何か？

【災害】を辞書で調べると次のように定義されている。

地震・台風などの自然現象や事故・火事・伝染病などによって受ける思わぬ災い

あの大震災から今年は何年目。被災地は当然のことながら、東北全体も、東北以外に暮らす関係者もけつして忘れることはない。

あの災害は、大地震が発端で、次に大津波。そして沿岸部の大火災。

それから何といつても、福島第一原発の大津波による破壊と原発爆発と放射能漏えい。これは人災だった。

災害という観点からみると、あの大震災は複合的なものであった。複数の自然災害と人災が絡み合った災害だった。

地震と津波以外の災害は忘れていないか？

あの大震災が強烈なインパクトを与えたので、地震と津波以外の災害を考え、対策を検討する余裕はないように見える。

確かに、まだ完全に復興

工事が完了しているわけではないし、先般の大きな余震と呼んではいけない地震も来たり、第一、福島の放射能の風評被害は続いているので、それ以外の災害といつてもなかなか頭を切り替えることなどできないのかもしれない。

災害対策基本法では災害の分類として「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火その他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害」を挙げているが、この中では筆者は特に噴火に目が行く。

火山噴火の可能性

ここ百年間ほどは東北では大きな噴火は発生していない。

しかし、全国的には、長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山噴火、鹿児島県の桜島噴火、群馬の浅間山、白根山などははつきりとした噴火が見られた。

東北の火山にも小さな火山性地震が頻発しているの噴火と無縁とはいえない。東北は北から南まで火山だらけなのだ。

筆者の年代では、近年噴火が見られない火山を「休眠火山」と教えられたが、火山学に「休眠火山」という概念はないそうだ。

ということは、いつでも

起きる可能性があるということだ。

カルデラ火山噴火というものは？

しかし、それ以上に怖いのは、カルデラ火山噴火である。

最近、鹿児島島の南の海中にある「鬼界カルデラ」を取り上げる機会が増えたので、カルデラ火山のことも以前よりは浸透してきた。

このカルデラ火山は、ひとつの火山が単独で噴火する規模とは比較にならない規模の噴火を引き起こす。

参考までに「鬼界カルデラ」の噴火イメージ図と火山灰が降った範囲想像図を下に張り付けたので参照されたい。

火山灰が降ったエリアは全国規模であるし、朝鮮半島にまで及んでいる。

この噴火で約七千三百年前に九州は壊滅したと言われている。

東北のカルデラ火山

そして、驚くなかれ、東北にはかつて多くのカルデラ火山があったのだ。

信じられないという方のためにあえて列挙してみる。詳しくはそれぞれのカルデラ火山を調べてみていただきたい。

- 十和田カルデラ
- 田代平カルデラ
- 西岩手カルデラ
- 秋田駒ヶ岳カルデラ
- 田沢カルデラ
- 肘折カルデラ
- 鬼首カルデラ
- 鳴子カルデラ
- 向町カルデラ
- 馬の背カルデラ(蔵王山)
- 雄国沼カルデラ
- 沼沢カルデラ
- 砂子原カルデラ
- 栗研カルデラ(やげん)
- 大畑カルデラ
- 陸奥畑カルデラ
- 湯ノ沢カルデラ
- 奥入瀬カルデラ
- 大湯カルデラ
- 大葛カルデラ
- 湯瀬カルデラ
- 田山カルデラ
- 八幡平カルデラ
- 先焼山カルデラ
- 玉川カルデラ
- 宮田カルデラ
- 乳頭カルデラ
- 田沢湖カルデラ
- 男助カルデラ
- 川舟カルデラ
- 南郷カルデラ
- 厳美カルデラ
- 院内カルデラ
- 三途川カルデラ
- 栗駒カルデラ
- 花山カルデラ
- 赤倉カルデラ
- 七ツ森カルデラ
- 山寺カルデラ
- 白沢カルデラ
- 川崎・遠刈田カルデラ
- 白鷹カルデラ
- 青麻カルデラ
- 赤湯カルデラ
- 七ヶ宿カルデラ
- 飯坂カルデラ
- 板谷カルデラ
- 大峠カルデラ
- 横向カルデラ
- 木地小屋カルデラ
- 高玉カルデラ
- 上戸カルデラ
- 高川カルデラ
- 城ノ入沢カルデラ
- 塔のへつりカルデラ群
- 小野カルデラ
- 成岡カルデラ
- 松和田カルデラ
- 入山沢カルデラ
- 矢沢カルデラ
- 八塩田カルデラ
- 古町カルデラ
- 山王峠カルデラ
- 八総カルデラ
- 木賊カルデラ
- 奥只見カルデラ



鬼界カルデラ噴火イメージ図

約7300年前に超巨大噴火が起きた

→ 将来も再び起きる？

火山灰が積もった地域

阿蘇カルデラ

始良(あいら)カルデラ

薩摩硫黄島

竹島

鬼界カルデラ

九州が壊滅した鬼界カルデラ

- 飯坂カルデラ
- 板谷カルデラ
- 大峠カルデラ
- 横向カルデラ
- 木地小屋カルデラ
- 高玉カルデラ
- 上戸カルデラ
- 高川カルデラ
- 城ノ入沢カルデラ
- 塔のへつりカルデラ群
- 小野カルデラ
- 成岡カルデラ
- 松和田カルデラ
- 入山沢カルデラ
- 矢沢カルデラ
- 八塩田カルデラ
- 古町カルデラ
- 山王峠カルデラ
- 八総カルデラ
- 木賊カルデラ
- 奥只見カルデラ

荒沢岳カルデラ
何という数であろうか。東北は他の地方よりも圧倒的に数が多いのである。また、様々な研究により、東北のカルデラ噴火の周期が推測されている。すでに約七千年という次の周期期間入りしている「鬼界カルデラ」の周期よりはおおむね長いようだ。

火砕流は時速900キロで周辺に流れていく。このスピードでは、阿蘇山から北九州までに火砕流が到達する時間はわずか十分だといふ。発生の際、緊急速報が出て逃げ遅れるのはとても間に合わない。徒歩はもちろん、車もだめであろう。わずかな時間で何が出来るものか。ではどうするか。カルデラ火山の継続的な調査しかないだろう。噴火には何らかの兆候があるはずだし、それをキャッチするしかない。しかし、その前に、カルデラ火山がどこにあるかを知る必要があるのだ。